



子どもが主役の学校って、どんな学校？

多数決で決めない、 子どもが対話で「ともに、つくる」 箕面こどもの森学園

子どもが主体的に生きる 自由な場所

「箕面こどもの森学園」が立ち上がった経緯を伺えますか？

佐野さん:本学園は、もともと大学教授だった前代表理事の辻正矩が、大学生の無気力さや依存的な姿を見て「このままではいけない」と思い、仲間を集めて立ち上げた学校です。初めは、子どもが主体的に生きる自由な学校をつくりたいという思いのもと、外国の自由な教育の事例調査や現地視察に取り組みました。そして、フランスのフレネ教育やオランダのイェナプラン教育などの市民性教育を取り入れながら、2004年に前身となる「わくわく子ども学校」を設立し、今年で19年目を迎えます。

学園の中で、大切にされていることは何でしょうか？

佐野さん:「それぞれの興味関心に沿って学ぶこと」「生活の中で学ぶこと」「それぞれの意見が尊重される環境」を大切にしています。話し合いの中で少数の意見が取り入れられず、「自分の意見を言っても仕方がない」と感じると、他者への依存や無気力につながってしまいます。でも、「どんな意見でも受け取ってもらえるんだ」と感じられれば、「自分でもやってみよう」と主体的になっていきます。そこで、本学園では「対話」を大切にしています。対話には、平和的に問題を解決したり、新しいものを生み出す力があります。誰かが一方的に決めるのではなく、対等な立場で対話を通して共につくっていくことが、市民性を育むことにもつながると考えています。

対話を通して自分を大切にされていると感じるからこそ、主体的になれるのですね。

守安さん:意見を受け取るだけではなく、その子の気持ちを受け止めることを大切にしています。そして、自分のことは自分で決める「自己決定」を大切にすることで、学校が「あなたはここにいていいんだよ」と感じられる、存在そのものを受け止めてもらえる場所になっていきます。一人ひとりが大事にされることで、大事にされた人は人のことも大事にできるようになり、対話ができるようになる。それが、自己肯定感を育む土台になると考えています。

「全ての学習の場で子ども一人ひとりを尊重する」という思いをカリキュラムの中に織り込んでおり、それがこの学校のあり方なんです。

具体的なカリキュラムについても伺えますか？

守安さん:具体的には、「ことば・かず」「テーマ」「プロジェクト」「ハッピータイム」などいろいろな学習がありますが、全てに「一人ひとりの子どもの自己肯定感が育まれる」要素を入れるようにしています。自己肯定感が育まれると自然と「対話ができる人」に育ちます。

特に大切なのが、サークルになって自分が感じていることを自由に話す「ハッピータイム」という時間です。スクールに向かう道の途中での出来事、昨日の夜の出来事を話す子もいれば、何も言うことがなければバスもOK。自分のことを皆に話して聞いてもらう時間が毎日必ず保証されています。些細な時間ですが、これが落ち葉の1枚1枚のように積み重なって、腐葉土のようになって、心の豊かさにつながっていると思います。

Profile

箕面こどもの森学園 校長

佐野 純

私立の中高一貫の進学校で偏差値による序列ができるのを経験し、そこに課題意識を持つ。教育に携わろうと学習塾を運営する企業に就職し一斉指導の講師を務めるが、違和感を覚えて退職。その後「学び合い」を実践する学習塾に出会い、教室責任者として活動しながら、対話の場や子育て支援の講座などを企画・運営。その頃に多様な教育を推進する活動の中で箕面こどもの森学園に出会う。非常勤スタッフとなり、中学部開設準備会メンバーに。2015年、中学部開設時に常勤スタッフとなり、2022年、校長に就任。



箕面こどもの森学園 高学年スタッフ

守安 あゆみ

ニールの自由教育を学んだ両親のもとで育ち、大学で教員過程を学んだが、学校教育に疑問をもち教師にならず、一般企業へ就職。子どもが「わくわく子ども学校」に入學すると同時に自身もスタッフとして参加。2012年に常勤スタッフになる。2022年に認定NPO法人コクレオの森副代表理事を退任。現在、認定子育てHATマイスター、メンタルファウンデーション認定コーチとして、子育て支援やコミュニケーション講座の活動もしている。



TOPIC

学校や子どもの学び場において、ついつい大人の都合を優先して決めてしまうこと、子どもの思いを抜きにして話が進んでしまうことはありませんか？「学校の主役は子どもたちのはず。子どもたちが主役の学校をつくることは難しいのだろうか?」そんな問いの自分たちなりの答えを見つけたくて、20年近く前から真に子どもが主役の学校を運営しているオルタナティブスクール「箕面こどもの森学園」取材しました。子どもたちが主体となり、多数決をしない、話し合いをしていく「集会」の時間を中心に、子どもたちの個性を尊重し、成長を支えるスタッフのあり方や思い、「ともに、つくる」ことを大切にしている学園の考え方を、校長の佐野さんとスタッフの守安さんにお聞きしました。

私たちが取材しました!

The Lab of Future Innovators and Creators 代表

藪崎 喜子 (右)

やぶさき よしこ

箕面こどもの森学園 スタッフ

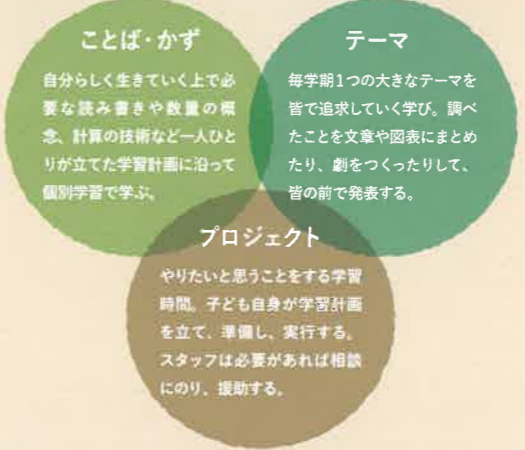
藤 孝史 (中央)

ふじたかふみ

吹田市立千里新田小学校 教諭

殿村 英嗣 (左)

とのむらひでつぐ



	月	火	水	木	金
9:00~9:20	ハッピータイム				
9:20~10:00	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず
10:10~10:50	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず	ことば・かず
11:00~11:40	スクールワーク	テーマ	プロジェクト・演劇	テーマ	学習計画
11:40~13:00	昼休み	ハッピータイム	昼休み	昼休み	昼休み
13:00~13:55	プロジェクト・演劇	プロジェクト・演劇	プロジェクト・演劇	プロジェクト・演劇	プロジェクト
14:00~14:40	プロジェクト・演劇	プロジェクト・演劇	プロジェクト・演劇	プロジェクト・演劇	プロジェクト
14:40~15:00	ミーティング・演劇	ミーティング・演劇	ミーティング・演劇	ミーティング・演劇	ミーティング・演劇

▲時間割の一例

に1回以上話し合いの場を設けています。その中で、子どもたちが司会やホワイトボードへの書記、ノートへの記録など、役割を担いながら集会を進めていきます。

「集会」で大切にされていることは何ですか？

佐野さん:民主的といえは多数決のイメージがあると思うのですが、ここでは「多数決はしない」ことが浸透しています。子どもたちの中でも、そこにこだわりを持っているなどという場面に出くわすことも多く、多数決をしたくなる場面でも「この学校は多数決しないんやっだね」と別の方法を考える様子が見られます。少数の意見でも尊重する前提のもと、最終的には反対する人がいない案が出るまで話し合います。一部の「これ、いいね」より「これだったら皆大丈夫」となるまで、時間がかかっても合意形成を図っています。

多数決で決めない、 合意形成するまで対話する文化

「民主的な市民が育つ学校」という理念を掲げていらっしゃいますが、具体的にどのような取り組みがありますか？

佐野さん:いろいろな場面で対話の練習をしていますが、1つに「集会」という場があります。小学部集会と全校集会や、クラスごとに開く低学年集会・高学年集会・中学部集会があり、週





多数決で決めないことは大切だと感じる一方で、難しいイメージがあります。

佐野さん：どうしても1人だけが「それは嫌だ」と反対するときもありますよね。そのようなときでも、まずは受け取れることを大切にしています。そうすると、気持ちを受け取ってもらえたら、それで良かったとなることもあるんですよ。話し合いもずっとしていると、結論が出にくかったり、膠着することもあります。そこで少し休憩があると、反対していた人が折衷案を出してきたり、周りの人も提案してくれたり、話がまとまることもありました。それができるような余白のある場づくりを意識しています。また、スタッフ(※)はいつも参加者の1人として参加しているので、状況を見ながら意見を混ぜたり、提案したりすることも必要なと思っています。

※こどもの森では子どもたちと関わる大人を先生ではなくスタッフと呼んでいるそうです

実際に時間がかかって合意形成に至ったエピソードなどがあれば伺えますか？

守安さん：高学年の修学旅行は、行き先の決定やお金の工面など、何から何まで子どもたちが準備を進めます。今年度もこれから資金調達のためにフリーマーケットを行うのですが、その準備がようやく始まったところです。1学期に行き先を決めるとき、京都と大分のどちらに行くかで意見が割れてしまったので、対話して行き先を決めるのに多くの時間を費やしました。最終的には、京都に行ってそのまま大分にフェリーで行く案に決定しました。

子どもたちが自分たちで修学旅行をつくっていくのですね。

守安さん：そうなんです。でも、数年前の修学旅行で「子どもたちの準備が間に合っていないからスタッフが頑張らない」となったときがありました。そのとき、スタッフが旅行先で子どもに「次どうすんの？」「次どこ？」と聞かれて、ショックを受けていました。「子どもの修学旅行なのに子どもがスタッフに聞いてくるなんて...」と。それで翌年からは、スタッフが引っ張ってまで修学旅行に行かせることは止めました。大人としては、修学旅行に行かせてあげたいじゃないですか。でも、つつい最後の方でちょっと手伝ったら、子どもが依存してしまったというエピソードがあったんですよね。

心配して、つい口を出してしまう気持ち、よく分かります。

守安さん：心配が大きくなると、どうしても大人が引っ張ったり、ルールを作って管理的な決め方になりがちです。でも、心配することよりも「任せて大丈夫！」と信頼することにしています。話し合いを重ねた上で「皆が納得してやってるんだったら大丈夫だろう」という信頼ベースの文化があるので、成立しているのかな。だから、最後まで子どもの主体性を尊重して、最終的に「修学旅行に行けなくてもいい」ぐらいのところまで大人の意思を手放したときに、子どもたちが本当に自分たちで進めていくのだと思います。

1人の人として、子どもたちと共に

先ほどの話の中でもあったのですが、実際にスタッフの皆さんは何を意識して子どもたちと接していますか？

佐野さん：基本的には、子どもたちのアクションを待つ意識を大切にしています。ただ、スタッフも感じたことや思ったことは伝えるようにしています。集会でもスタッフ会議でも言いたいことがあれば、そのときに伝える。あとから「本当はこう思っていた」はないようにしています。その場の参加者の責任として、思っていることは伝える。それは子どももスタッフも同様で、もちろん言い方やタイミングは考えますが、そのような姿勢を大事にしています。ただ、最初から大人がバンバン進めていくと子どもたちの話にならないので、ある程度待ってみたり、様子うかがったりしつつ、そのときの雰囲気やスタッフによっても関わり方は異なりますね。

スタッフの共通意識は、どのように醸成していますか？

守安さん：ここは理念をもとにつくられた学校なので、一人ひとりが目の前のことに対して、理念に立ち返り考えて行動しています。もちろん判断に迷うことがあれば、誰かに相談したり、スタッフ会議で皆で協議することもあります。また、自分たちが大切にしていることを「9つのエッセンスと11のガイドライン」という20の項目に文章化しています。そういった立ち返る大きな軸を共通で持ちながら、スタッフに権限移譲しています。

9つのエッセンス

- 01 自分を表現しよう
- 02 チャレンジしよう！
- 03 計画を立てて学ぶ
- 04 「好き」をだいに、人生をつくる
- 05 自分も人も大切にする
- 06 協力しよう
- 07 話し合って解決しよう
- 08 いろんな見方をして、全体を考えよう
- 09 平和な暮らしが続くために、小さな一歩をふみだそう

11のガイドライン

- 01 かけがえない存在
- 02 学ぶ理由
- 03 自分ですすめる学び
- 04 生きる力を育む場
- 05 ともに作る学校
- 06 話し合いと体験の大切さ
- 07 そのままの自分であること・相手をわかろうとすること
- 08 自分を生きることのできる社会
- 09 信頼でつながろう
- 10 人も地球も大切にされる社会
- 11 話し合いで解決しよう



理念をもとに集まったスタッフだからこそ、共通意識のもと任されているのですね。

佐野さん：前提として大事なことは、「スタッフである前に、1人の人である」ということです。どうしても教員・先生として子どもたちの前に立つと、「先生を演じる」みたいなことはよくあることかもしれません。でも、ここのスタッフは「スタッフだからこうしないとイケない」がありません。1人の人として「どう感じるか」「どう思うか」を大切にしています。スタッフが感じたことがあれば、それを伝えていいし、表現していい。自然体な自分であるという「あり方」を大切にしています。

変わり続ける学校でありたい

今後、日本の教育はどうなっていけばいいとお考えですか？

佐野さん：1つは、小さな学校という形で、市民が自分たちの思いをもとにつくる学校が増えていくことが大事だと思います。私たちの大切にしていることが、実際にカリキュラムなどを通して子どもたちに伝わり、市民の思いとして実現している学校の1つのモデルになればうれしいです。そういった学校が、私たちのスクールだけでなく、日本でも当たり前になるような社会になったらいいと感じます。

市民の思いが実現できる学校がどんどん増えていくといいですね。

佐野さん：とはいえ、制度論に詳しい方に聞いたところ、制度を変えることはとっても難しいようです。しかし、その中でも変化の中心部をつくっていくことが大切だとも聞きました。小さい取り組みでも「これ、いいね」「ちゃんとできているね」と多くの人に知ってもらえると、大きく変わっていくきっかけになります。



箕面こどもの森学園が、その変化の中心部になれるような学校になれたらいいと思いますし、そのために自分たちも変わり続けていきたいと思っています。その時々や目の前の子どもたちによって、これからも変わり続ける学校であり続けたいですね。

「変わり続ける学校」って、素敵です。

守安さん：新しいタイプの学校が増える一方で、今ある学校にも良い影響を与えられたら...とも思っています。最近では、大人向けの講座も開催しており、クラス単位で実践していただけるようなプログラムや取り組み、先生のあり方をお伝えしています。外側からだけでなく、今ある学校もより内側から。少しずつでも、子どもたちがより幸せになるような関わりを増やしていくお手伝いがしたいです。

箕面こどもの森学園は、これからどのように進化していきたいですか？

佐野さん：私たちは子どもの主体性を育み、対話を大切にする2校目をつくるプロジェクトを進めています。ただ学校をつくるのではなく、地域やまちづくりともリンクさせた形で取り組んでいます。学校が中心となって、その街がまた元気になる。そんな学校になることを目指しています。ぜひ応援してください。



「箕面こどもの森学園」を運営する
認定NPO法人コクレオの森の
詳細・支援にご興味がある方はこちら

